

巻頭言

試行錯誤による成果

コミュニティ福祉学研究科委員長 三本松 政之

本紀要は今号で第15号になる。第1号は2003年3月に発行されている。同号には出発したばかりのコミュニティ福祉学研究科の前期課程1年次の学生たちにより執筆された6本の論文、2本の研究ノート、2本の翻訳が掲載されている。当時の研究科委員長の坂田周一教授による巻頭言には「コミュニティ福祉研究科がスタートして1年が過ぎ、その成果が『研究紀要』に結実したことを喜びたいと思います。そして、しり込みをする人もいるなかで、果敢に成果を発表した投稿者諸君の勇気を讃えたいと思います。論文を発表することは学問の発展に一石を投じるばかりでなく、その本人にとっては、自分を客観的にみつめることであり、他者による検討に身を委ね、他者からの批判を活かすことであり、自らを相対化することであり、自分の思考を今よりも前に進めることです」と記されている。

本紀要には毎年ほぼ10本前後の論稿を掲載し続けて来ており、15号目を迎えた本号にも投稿者諸氏が果敢に成果を発表している。過去の号の目次のタイトルを見てみても多彩なテーマに院生諸君が取り組んできていることが分かる。研究を進めていく上で大切なのは、当然のことではあるが、何を明らかにするためにその研究を行うかということである。そのことを知る手掛かりが論文のタイトルである。それだけにタイトルは、論文の内容を明確かつ正確に示すように工夫する必要がある。

タイトルを決めるプロセスは、著者にとっては自分がその論考で述べようとしていることを自覚化していく過程にもなる。しかしこの確認作業が十分になされないまま執筆を始めてしま

うと読み手には論文の目的がどこにあるのかが伝わらないことにもなる。私たちが研究に取り組む際には、いくつかのレベルでのテーマ設定が求められる。1冊の著作や博士論文などのように長期の時間をかけながら独自の視点から新たな課題に切り込んでいくという意味での大きなテーマ設定のレベルのものがひとつである。しかし、いきなり大きなテーマにアプローチすることは難しい。大きなテーマをいくつかに切り分けて下位のテーマを設け、それを博士論文や著作でいえば部あるいは章ごとのテーマとして設定する。論文でいえばまさにタイトルがそれにあたる。

論文の内容を明確に伝えるためには、タイトルとともに論文の構図を事前に描くことが大切である。論文を執筆する背景にはどのようなことがあるのか、研究目的を達成するための手段はどのようなものかなどの見通しを持つ必要がある。科研費の申請書の書式はこの点で参考になる。申請書式の「研究目的」では、研究の全体構想及びその中での当該研究の具体的な目的について概要を簡潔にまとめて記述することが求められ、さらに①研究に関連する国内・国外の研究動向及び位置づけ、着想に至った経緯などの学術的背景、②研究期間内に何をどこまで明らかにしようとするのか、③研究の学術的な特色・独創的な点及び予想される結果と意義が求められる。

どんなに独創的だと思ってもそれが独り善がりでは困る。そうならないためには先行研究にあたり、研究動向を確認したうえで自分の進めようとしている研究を位置づける必要がある。また課題に独創性があってもその課題を研究す

るための具体的な方法が必要となる。申請書式では「研究計画・方法」で、「研究を遂行する上での具体的な工夫（効果的に研究を進める上でのアイデア、効率的に研究を進めるための研究協力者からの支援等）についても、焦点を絞り、明確に記述してください」としている。研究の実践には、限られた研究期間内に当該研究において何をどこまで明らかにしようとするのかという具体性が求められる。論文執筆で言え

ば、何を明らかにしようとしているのかを明確に示す必要がある。そして書き上げた論文にそれが明確に示されているか確認し、推敲する作業が求められる。

本号に掲載された論稿もそのような試行錯誤の成果であろう。論文を書き上げることで次の課題が明らかになる。本号での果敢な取り組みが執筆者諸氏の次の成果につながることを期待したい。